

## ミニ・シンポジウム 日本における医史料の保存について

## 1 医史料の保存

司会 杉田 暉道

医学教育の中で医史学が重要な位置を占めることは今更改めていうまでもないが、しからば日本全国の医科系大学の中で医史学講座を持つ大学が幾つかあるのかと調べてみると、何と順天堂大学一つのみというお恥ずかしい答えがかえってくる現状である。

外国の医学教育の実態をみると、アメリカにおいても、ヨーロッパにおいても、医科大学には医史学講座が立派に設けられている。

それでは日本の医師は医学史に関心がないのかというと、決してそうではない。一人一人について聞いてみると、中年以後では大半の医師が医学史に関心があるか、または興味を持っているのである。そしてこれらの人は二つのタイプに分けることができる。一つのタイプは、自分の家の家系に過去に医学上優れた人が存在したか、または優れた医学書を有している人で、もう一つのタイプは、今まで医師として歩んできた過程において、医学上立派な業績をあげたことがきっかけとなって医学史に関心を持つにいたった人である。このように個人個人自身は医学史に関心があるのに、何

故日本の医学教育では医史学が重要視されないのであろうか。それは医学教育の組み立て方に問題があると考えられる。すなわち、日本人は即物的で現実主義重視の傾向を有する国民である。したがって医学教育では、人格の育成よりも治療の実際面を重んずる教育が行われてきた。このために医史学のような人文科学的な学問は重視されなかったと思われる。しかし今や医学教育において、医史学の重要性が次第に認識されるようになった。

ところで今まで行われてきた医史学の研究の動向をみると、医学の発展という観点からみて、今まで埋もれていた重要な人物またはある現象を鮮明にすることに重点がおかれ、これらが医療社会にどのような影響を与えたか、またはこのような人物や現象が出現するにいたった社会的背景はどのようなものであったか。というような社会的にみた歴史的考察の研究は少なかった。

今後の医史学の研究は、現代の社会が抱えている医学および医療の問題点を歴史的に明らかにし、今後の進むべき方向を正しく示唆することができるようになることが強く要望されている。この為には、今後の医史学の研究は、医師のみでなく人文学者の協力を得て学際的な研究が行なえるような体制に持つていく必要がある。

このような視野にたつて「医史料の保存」を考えると、従来の医学図書館または医療器具の保存館の整備という発想から脱皮した新しい発想による「医史料の保存」を行う必要がある。それは資料を見るのみでなく、体験できる形に整備するということである。さらに医学、医療と密接な関連のある社会学関係あるいは民俗学関係の史料も必要となってくる。

今回は「医史料の保存」というテーマで、この方面について長年深く研究され、造詣の深い三氏の先生方にこれからご発言をお願いしたいと思う。